

典芸能担当山岡知博先生。

第十八回錦心流琵琶演奏大会

十月十五日(日)十一時逗子市立図書館ホール、主催琵琶水会(会長平野鉦水氏)、主催市立図書館ホール、委員会・市文化協会(逗子市文化祭参加)。

金剛石一樋口▼桜狩一松枝▼静一小学五年三人▼川中島一重衡一今▼石童丸一佐藤▼月下の陣一樋口▼竜の口一内藤治▼別れの国歌一齊藤淑水▼屋島の誓一坂井田政▼城山一脇田湘水▼耳なし芳一鈴木桜陽▼生門一姉崎証水▼山科の別れ一樋口精水▼小栗栖一本庄宵水▼曲垣平九郎一三門葉水▼伊大老一會主平野鉦水▼教盛一今井城水▼坂本竜馬一森捧水▼横笛一甲田勸水▼最涯のツカ桜一土橋虎水▼舟弁慶一齊藤殊水▼毒饅頭一菊間東水▼西郷隆盛一横溝交水▼琵琶舞管公一木庄、三門、平野、舞白井洋舟▼湖水乗切一鈴木謙水▼白虎隊一山田幻水▼坂崎出羽守一梅沢向水▼本能寺一榎本山水▼掛合曾我兄弟一藤川晴水▼松本孝水、高橋狸水、松岡遊水▼別れの盃一石井桑水▼俊寛(下)一荻野甲

錦・都派琵琶秋の公演

十月十六日(月)午後四時東京銀座座ガスホール、主催錦徳後援会。都(大場)徳苑女史の奥伝披露を兼ね盛大に開催。またプログラムは華麗斬新な装いで好評であった。吟詠一會員は華同▼金剛石一阿伊染▼城山一鈴木徳正▼重衡一丸田徳容▼月下の陣一佐々木徳紅▼白虎隊一青木徳英▼勿来の関一松井徳栄▼巡礼一藤原徳静▼掛合奇縁一齊藤徳嶺、大知里徳仙▼井伊大老一都徳鳳▼横笛一甲田勸水▼吉野の春一會員一同。絃錦徳・琴永井歌寿美▼天目山一山下晴楓▼曲垣平九郎一都徳苑▼鉢の木

予告

○赤心流琵琶・詩吟演奏大会 十一月三日(休)午前十時静岡岡城内、奥婦人会館(会主赤心流鶴翁氏)。會員の外東西の各流派名手数氏ゲスト出演。

○錦心流一水会全国大会 十一月四日(休)午前十時東京銀座座ガスホール。五日(日)午前十時総会、懇親会(新宿芙蓉会館)。

○京都琵琶協会十一月例会兼観劇会 十一月十二日(日)午前十時半京阪電車稻荷駅集合。

○晴風会の霜月例会 十一月二十三日(休)午後六時東京杉並区高円寺会館、会長浅野晴風氏。(会費五百円)。

一輝錦徳▼異国の丘一杉山旗水▼子育て観世音一(会主)都錦徳▼雪晴れ(上)桑名洲聖▼西郷隆盛一友吉鶴心▼吟詠一土田岳心。

京都琵琶協会十月例会 十月十五日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅。(次号詳報)

阿部秋子琵琶の花道特別公演 十月二十二日(日)正午名古屋中小企業福祉会館ホール、主催名古屋秋声会。(次号詳報)

光椽会詩吟・詩吟詩舞の会 十月二十二日(日)午前十時高槻市民会館、主催山崎光椽会。(次号詳報)

各流派琵琶合同演奏大会 十月二十九日(日)正午京都商工会議所ホール、主催京都琵琶協会。創立三十周年記念演奏会。會員の外東西の名手四氏ゲスト出演。(次号詳報)

第十七回琵琶と詩吟詩舞の会 十月二十九日(日)西宮市夙川公民館松下ホール、主催三浦蓮水会。蓮水會員、一水会神戸支部會員の外東西の名手五氏ゲスト出演。(次号詳報)

琵琶 機関紙

京 絃

第二九三号 京 絃 社

琵琶 (二)

忘れられんとする音の世界



九州の盲僧琵琶

三つの琵琶文化の流れ

私は九州、中国地方各地を歩き続け、これまでに八十ヶ所余りの盲僧院坊を訪ねた。広大な阿蘇山、煙立つ、南に聳える桜島、山上から見た長崎市の夜景など旅の途中で出会った各地での印象的な風景が想い起こされる。私はバスもあまり通わない山間部や、五島列島、宍粟、対馬、天草など、多くの島々へも足を延ばした。旅は三週間を越えることもしばしばであった。ここで私は、探訪記を続ける前にこれらの地域に於ける地神盲僧を中心形成されてきた琵琶文化について、簡単に触れて置きたいと思う。

これらの地域に於ける琵琶楽を分類するとすれば、大きく三つの系統に分けられるであろう。

一つは北九州や中国地方の地神盲僧達によ

る琵琶の流れであり、もう一つは、同じ盲僧ではあるが、旧島津藩領(鹿児島県と宮崎県の西南部)の盲僧達による琵琶の流れである。また、これらとは別に、肥後(現在の熊本県)を中心に軍記物、端唄などの語り物や唄物を表芸として栄えた、俗に肥後琵琶と呼ばれる琵琶の流れがある。肥後琵琶については後で詳しく述べることにして、ここでは俗に荒神琵琶、地神琵琶などと呼ばれる二つの盲僧琵琶の流れについて触れてみたい。

二つの法流と盲僧行

明治初期に至るまで、各地の有力な院坊を拠点としてそれぞれ活動していた盲僧達は、明治八年七月、教部省通達により天台宗に属することになり、九州北部及び山口、島根両県の盲僧は玄清法流に、九州南部の盲僧は常楽院法流に属することになった。玄清法流は現在、福岡市南区西高宮にある成就院をその

本寺としており、常楽院法流は宮崎県日南市飯肥町に在る常楽院を本寺としている。

それから成就院には、「玄清法印芳蹤記」という縁起が伝えられている。これは、博多蔵本町にあった臨江山妙音寺の縁起「盲僧由来」をもとに、明治期に書かれたものである。この中には盲僧の由来が詳しく記されているが、その内容は伝説的なものであり、他の宗教者や芸能者達の縁起譚と同様に、全てを史実として認める訳には行かないであろう。

また、常楽院法流にも同じような内容を持つ「地神盲僧根元」という縁起が伝えられている。これをもとに四十五代の常楽院主、江田俊了は昭和七年、「常楽院沿革史」を著した。これらの縁起には芋芸の神、水の神、財福の神などとして一般に知られる弁財天が、彼等の護り神として出て来る。琵琶を抱える弁財天は大日経では「美音天」、「妙音天」などとされ、弁舌の神、音楽の神としての性格が強く説かれている。

さらに、「金光明最勝王経」には、知恵と弁舌の神として、また戦闘の神としての弁財天が出て来る。盲僧の奏でる琵琶とその妙音は、この弁財天に対する人々の素朴な信仰と密接に結びついていたのであろう。また柳田国男は「米倉法師」の中で、古代の盲人が持っていた固有の水の神に対する信仰と、その後の盲人の弁財天に対する信仰の関わりについて示唆している。

玄清法流の盲僧達は、土用行と称し壇家を

晴風実演再録集 (京絃社推奨品)

1 坂崎出羽守	2 蒲生氏郷
3 設楽ケ原	4 乃木将軍
5 薄陽江	6 湖水乗切
敦盛	舟弁慶

全六巻 五万円(送料共)
 巻巻の場合 壱万円(送料共)
 東京中野区中野二ノ五ノ六
 申込所 浅野晴風
 電話〇三(三八一)八九二二番
 (三六二)〇〇六一番

あとがき

菊花薫る秋、錦繡爽快の秋、琵琶を奏しむ秋。雨のない長い夏が過ぎてやがて冬が来るまでのしばらくの快よこの季節に存分に琵琶を奏してみたい。前号で錦心流の古老三人の計を報じたところ残念だという手紙が二、三の紙友から届いた。明治大正生まれの多い現在の琵琶人がだんだん少なくなっていくのは誠に淋しい。お互いに無理をせず自身をいとうよう充分心懸けたいものである。正座して腹の底から声を出し自我を忘れて歌中の人物となりきって好きな一曲を弾くことは大きな健康法で、琵琶人に与えられた特権である。

昭和五十三年十一月一日発行(非売品)
 編集者 植村真水
 発行所 京絃社
 〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
 電話〇七二六(七三)六〇五一番

廻り、荒神祭、地神祭、水神祭、その他の法を執り行い、壇家の入達から謝礼(金銭、米、その他)を貰い、生計を立てて来た。また、各地方に於ける信仰風土の違いから、盲僧の行方行事や法には多様なものが見られる。それには憑き物落とし・病氣平癒・祝事の祈禱・船祈禱・初祈禱・屋固め・畜舎の穢い・不浄祓・家祈禱・禁忌・占い・星祭・稻荷祭・鎮守祭・方角見などがある。なお盲僧が唱える経文、その他については、観音経などのように経本にあるものを除いては、地域により名称がそれぞれ異なっている。

彼等が用いている琵琶には、うぐいす琵琶(仮称)や、笹琵琶もしくはその変形と見られるものがある。ところで、丸味をおびた小型の琵琶であるうぐいす琵琶は、各地に見られるが、私は「うぐいす」という呼称をそれだけの地域で確認した訳ではない。しかし佐賀市やその周辺の盲僧の中には、実際に笹琵琶と区別してうぐいす琵琶と呼んでいる例があるので、以後私はこの琵琶を仮りにうぐいす琵琶と呼ぶことにする。また、現在では筑前琵琶を使用している例も見られる。彼等は演奏の際、琵琶を斜めに構え、左手の指の腹で柱の脇を押えたり、また柱と柱の間を押えたりして音に変化を加えながら、右手に持った撥で奏する。

多少専門的な話になるが、琵琶の調絃法をみておこう。調絃法は、本調子、二上り、三下り、六下りなど様々なものがあり、地方に

よりそれぞれ異なっている。恐らく三味線音楽などが影響したものであろう。その中でも、私が特に興味を覚えたものは、長崎県の一部地域で見られる一・二の絃、三・四の絃がそれぞれ同音で、前・後者の首程関係が五度の調絃法である。

一方、南九州の常楽院法流の人達に関することであるが、その主な行法は玄清法流のものとほぼ同様であろう。ただ、常楽院法流では地神法が盛んに行われ、荒神法はあまり行われぬようである。

今日、廻壇の際には一般に薩摩琵琶が用いられるようであるが、実際に琵琶を弾き廻壇法要をする盲僧の数は激減しており、往時の音楽の様を想像することは非常に困難な情勢になって来ている。南九州の盲僧たちは、後に詳しく述べることにするが、以前は地神琵琶と俗称される琵琶を使用していた。

また、祈禱の際唱えられるお経や釈文(祭文)などは、呼称は異なるものもあるが、北九州や中国地方で見られるものと同じようなものが用いられていたようである。

の地神法楽、鹿兒島県日置郡吹上町の中島常楽院の妙音十二楽、宮崎県延岡市浄満寺の三楽などが僅かに残るのみとなってしまった。ところで、九州や中国地方の盲僧は、どのくらいいたのであろうか。昭和十八年の玄清法流の教師名簿には四百二十名余り、また常楽院法流の昭和二十八年の名簿には百二十六名の教師名が見られるがその数は現在では、三分の一程度に減少している。名簿に載せられていない盲僧の数は、減少期の頃のものであるから、もっと盲僧の勢力の盛んであった時代には、九州から中国地方にかけてかなりの数の盲僧達がいたことであろう。



我が道を行く
六十五年(六三)

西郷 天 風

それから数日後、海水浴のうわさも途絶え勝ちの九月央はだった。高崎市を中心に近い旅館兼下宿屋、清美館で野猪狩りのつかれ未だ消えやらぬ身を横たえて居る処へ、同じ下宿人で、毎朝愛想よく声をかける筋向いの部屋の住人で市役所の吏員君が、帰宿早々私の部屋へ飛込んで来た。「今夜市役所主催の映画会があるので、二人分の切符を持って来た、行きましようや」とさそう。

「百万年後の世界」と云う洋画との事で、面白そうではあるが何やら気分進まず、迷いながら折角の好意だ、好きを映画観賞で、案外気が晴れるかも知れずと、程近き映画館にと足踏み入れるや、ムウツとする人いざれが全身に異様なショックとなつて、画面に目をそ〜ぐ気力も失せ、連れの男に告げる言葉もそこそこ下宿へ戻つてみれば、女中たちは、此の清美館の副業である玄關脇のレストランに詰めかけ、盛んにウエイトレス振りを発揮してあり、三階から呼ぶ声など耳に入っているしもなく、急を要する布団は、人を呼ぶよりも自分で敷く方が早みちだった。

暫くして、市役所の吏員君にゆり起こされ昏睡から醒めた私は、入舟町の伊藤猛三郎に現状を伝えるよう頼んだまま再び眠ってしまった。

フト気がついた時、私は左右の人の首を両腕で抱えたまま階段を昇りおろす所だったが、そのまま気が遠くなつてしまった。やがて「氣付薬が利いたようだ、あとを頼むよ」と、見知らぬ人の声を残して立ち去るは誰かと眼をひらけば、そこは洋間風の部屋である。折柄足元で「気がつきましたね、よかったです、よかったです」と云いつゝ顔をみせたのは看護婦だった。聞けばそこは瀬名和病院で、昨夜十二時近くこの二階の病室に運ばれ、今まで七回注射をしたのだが、そのたびに「ききませぬ注射をしおつて」と、うわ言を云う始末に、院長は独り言を云いながら、氣付

薬を試みたところが、それがよかつたのですね。只今午後四時ですから、入院してもう十六時間にもなりますよ」と。

院長に対するうわ言には、只々恐縮の外なかつた、いや、そればかりか、この病院での私は、少々常軌を逸していたようであつた。

それと云うのも、琵琶をかついで遙々やって来て、かんじんの製糖会社訪問と云う大目的はおろか、生まれて四十余年この方、ついに経験のない病院生活。それも腎孟炎とか云う厄介な熱病に災いされ、当分の病院からぬけられそうもない。そこへ生産党の長迫氏が従軍証を手にして挨拶に来た。本来なら同行する間柄なるにそれもできず、くやし涙で別れを惜しむなど、私の身辺は意にみたぬ事ばかりであつた。

かくてその年も暮れ近くなれば、せめて正月だけでも無聊のなやみをさげ、琵琶でも抱いて楽しく過ごしたい。そこで、正月前に退院できぬものかと院長相手に交渉の結果、附近の民家で台湾人の一室を借り受け、付添いの看護婦が毎日通う厄介な患者となつたが、それも病気に結核性のもありとの判断から、わがままが通せたことだつた。

思えばこの院長のお蔭で病氣も大事に至らず、案外早く全快し、正月のうちに待望の上海に渡り、事変当初からの生々しい戦跡、凄惨を極める市街戦のあと等を見るにつけ、この有様を銃後に伝えるには映画にしくはなく、そののみが我々の果たし得る最良のみちとは

かり、早速長迫氏らと共に、高雄新報映画班編成の交渉に帰台したのが、三月も終る頃だつた。

当時台湾では、台北日々新聞だけが映画班を持って居り、それも経費難の噂が専らの中で、この話は容易にまとまりそうもなかつた。

折から、内地から出征将兵慰問の一行が現地への途上、この高雄新報社に立寄つたので、私は朝早くから新報社前に待合せ、パチーベビー撮影器(仏国製九ミリ半)に一行が五台のハイヤーで到着の模様から、勢揃いして社長連と挨拶を交わし、賑やかに社内にはいる所を始め、文選、組版、印刷等新聞紙になるまでの工程を撮影して暗室に入り、反転現像による一本の映画を作製して、其夜会議室に於て、編輯長初め社員達が「ウーム、もう出来たのか」と、驚きの目前で披露の映写を敢行し、小形映画の経済的にして尚且つ映画館等に劣らぬ程の機能は、読者へのサービス用として有効なるを力説すれば、速刻合議の末ここに十六ミリによる高雄新報映画班が成立直ちに諸般の準備に取りかかり、出発はその年の秋に予定された。

それからの私は、本来の目的である琵琶をかついで、先づ学校めぐりをはじめた。

(訂正) 十月号本文中「高尾」は「高雄」の誤植。



戦国時代の女性 (八)

はくすい

清盛の妻・時子と 頼朝の妻・政子 (3)

政子は、年令でいえば建礼門院徳子と同世代である。政子は平家の女性たちとは全くちがう。土の匂いのする伊豆の土豪の娘である。彼女は男たちをつくる政治の世界に漂い流れた平家の女たちとは反対に、自ら政治の世界に乗り込み、率領した。そのためには自分の生んだ息子たちの悲運をも見殺しにしてたじろがなかった。女として、母としての感情よりも、政治の世界に理性で生きを珍らしい女性である。

頼朝との恋愛からすでに壮烈な形をとっている。頼朝は政子との恋愛の前にやはり伊豆の土豪・伊東祐親の娘との間に子までもうけながら、平家を恐れる祐親によって生木を裂かれる悲運を味わっている。源氏の嫡流として雌伏二十年、すでに三十才を越している頼朝としては、女を愛するのにも将来の打算が混じらないわけにはいかない。反平家の情報は絶えず秘かに伊豆にもたらせている。いつ立つか、そのためにこそすべては凝集されている。政子はこの源氏の嫡流の男に賭けた。平家

の目代山木兼隆との婚礼の夜、雨のなかを花嫁衣裳のまま、頼朝としめし合わせ、伊豆権現の社へ脱出した。まさに生命を賭けたのである。彼女の父親だけが北條時政という男、勿論ただの土豪ではない。男として最大の侮辱を受けて激怒する山木を、権現の僧兵と合戦することの不利を説いてなだめ、いつのまにか頼朝をこっそりわが邸に迎えて婿としている。いづれ時代は源氏に向かつて微笑むであろう、と見込んでいる。

政子はこうして長女大姫を生む。徳子が安徳天皇を生んだ同じ年(一一七八年・治承二)である。反平家の鹿ヶ谷事件はすでに起こっていた。一一八〇年(治承四)いよいよ頼朝挙兵の時がきた。出陣の血祭りに代官の山木兼隆の首をあげた幸先はよかった。しかしつづく石橋山の合戦には源氏は無惨な敗戦を喫し、頼朝は主従数人で洞窟にかくれ、危く生命を捨てる。留守宅で夫の敗戦をきく政子の胸はつぶれそうであった。しかし、やがて安房に逃れ、勢いを盛り返し「鎌倉に本拠を置いて東国を固めるつもりだ、迎えをやり次第くるように」との嬉しい夫からの便りがくる。

それからの源氏は、戦えば勝つ幸運に守られる。富士川の平家の大軍を戦わずして敗走させた頼朝は深追いせず、鎌倉に腰をすえて東国を固める。鎌倉幕府の結構(かまえ)の整えられる中で、政子は長男頼家を生んだ。女の盛りの幸福に充ちていた。

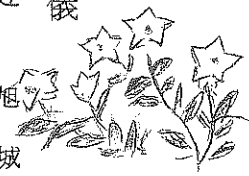
土豪の娘に生まれ、はつきりした自分の意志を持って、自分の恋を貫いた政子は、また強烈な情愛の持主であった。その彼女が、鎌倉殿の御台所という確固とした地位にいながら悩まされるのは、やはりいづこも同じ夫の浮気であった。龜ノ前と呼ばれる女性は、頼朝にとっては決して浮気などという軽い関係ではない。蛭ヶ小島の配所時代から、深い愛に結ばれた女性である。政子の嫉妬は、その愛とともに激しい。彼女は、牧宗親に命じて女のかくれ家を打ち壊させてしまふ。頼朝がまた激怒して宗親のもとどりを切った。政子も負けじと女のかくれ家を供した侍を配流するといふ、烈しいやりとりになる。

王朝の文化的な雰囲気の中で公卿の姫として深窓に育てられた平家の姫たちとは、政子はちがう。いかに一夫多妻が普通の時代とはいえ、自分が生命を賭けて愛した男は、やはり自分に純一な愛を持ち続けるのでなくては許せなかった。夫の側にあった愛の打算を政子は決して認めない。烈しい嫉妬のやりとりは何度となく起こらざるを得ない。

政子はしかし表面は男まさりの御台所として、揺るがぬ存在となり、次男の実頼、次女三幡を生む。平家は西海に滅亡し、その討伐戦に懸命に働いた夫の弟の義経、範頼は、頼朝と不和となり無惨に滅ぼされていった。このような一族に対する夫の酷薄さを、政子はどのように眺めたであろうか。平清盛という男に惚れ抜

太閤伝説 秀吉の葬儀

旭城



去る三月十一日、日本琵琶楽協会関西支部主催の琵琶各派名流大会が京都で催されたので、絃友田中敷水、石橋旭嶺両君と共に聴きに行き、帰途四条通りの料亭で食事をしたとき、横野旭園君が演奏した「関ヶ原」の批評から秀吉の葬儀に話がすすんだ。

秀吉が死んで半年後の慶長四年二月十八日に、その葬儀が高野山の木食上人を導師として、京都東山の太閤殿境内でいとも盛大に営なされた。参列者は、秀頼や北政所、淀君をはじめとして、徳川家康、前田利家らの五老、石田三成、浅野長政らの五奉行、それに加藤清正や福島正則等当時の大名小名まで一

人残らず参列した、という話題が出た。それから数日後、知り合いの堺市の某寺を訪つて、秀吉の葬式の有様について詳しく聞いてみた。話題のような盛大な儀式が営まれたのが事実とすれば、何等かの形で当時の記録が伝えられねばならぬ筈である。

当時の公卿や高級僧侶らの日記その他、史料として信頼できるものが残されている筈なのに、何一つ残っていないという。「愚僧もご質問について、あらゆる文献を調べてみたが、世間に伝えられているような盛大な葬式が行われたことを示す記録は見あたらない。つまり信用できる史料による限り、仏式での立派な葬式は行われなかったという。

こうなると、世俗に伝わる盛大な葬式というのは嘘ということになる。この疑問を解くために、一応政治情勢を分析してみよう。慶長三年(一五九八)豊臣秀吉は、竹田梅松軒を庭奉行として豪華な醍醐三宝院の庭園を築造した。太閤はまづ諸堂宇の整備を待って、同年三月十八日盛大な花見の宴を催した。ところが、この名園の完成を見ないで同八月十八日伏見城にて薨じ、その夜直ちに京都東山の阿弥陀ヶ峯に葬られたのであった。しかしその死は厳秘にふさぎされていた。まづ第一に国内の動揺を恐れたこともあったが、何よりもそのことが公けになれば、遠く海を隔てた朝鮮で、日夜困難な戦いを続けている日本軍將兵の士気が低下し、戦況が不利になるのを憂慮したからであった。重臣たちは秀

吉の死を極秘にして、急拠撤兵計画を建て直ちにこれを実施に移した。俄かに撤兵を始めた日本軍に対して、敵は一段と激しい攻撃を加えてきたため、撤兵の作業は困難を極め、全軍が朝鮮の地を離れて九州に引揚げを完了したのは、この年十一月も半ばを過ぎた頃であった。

この時分になって、漸く秀吉の死は公然の秘密となって一般に知られた。だが、それでも未だ公式の発表がなげなまま、翌慶長四年の春を迎えた。

巷では一月十日のえびす祭りや賑わっているとき、伏見城にいた秀頼が大坂城に移り、続いて二月二日、石田三成、浅野長政、長束正家、増田長盛ら五奉行の面々が揃って伏見城で髪を切った。これが恐らく太閤死去の公式発表に当るものであるが、やっとその頃になってこの事が行われたのは、朝鮮の役の後処理が一段落したからであろう。これで漸く対外的な難問は片づいたが、国内には尚葬式の実施をばむ複雑な政治情勢があった。かねてから五老の筆頭で、抜群の実力を保持していた徳川家康が、秀吉の死去を待っていたかのように、秀吉の遺言に反し数々の専横な振舞いをするようになった。そのため前田利家や石田三成を中心とする大名たちとの間が険悪となり、大規模な武力衝突が今にも起こりかねない状態となった。しかしこの時、利家と家康との間で円満解決の誓書を交換して、一応緊張は柔いだので

州詩一阿井雄心(俊寛)市川鶴峰(以下
来賓)大楠公一浜松栢沢眞峰(櫻井)京都
市中鵬水(鉢)木一横須賀石井桑水(那須)与
坂崎出羽守一同梅原旭濤(茨木)横濱中谷
水(安宅)関一東京若宮旭登(曲垣)平九郎一
広島板谷旭(名月)逢坂山一東京鈴木流泉(東
海)望月(以下相談役)巴一東
京望月(以下相談役)巴一東
京望月(以下相談役)巴一東

十一月四日(午)前九時半東京銀座ガスホ
ル、主催同会本部(会長鈴木六水氏)。本部
を初め全国三十九支部の選良が全四十六曲の
単奏又は合奏で覇を競い錦心流の特長を遺憾
なく発揮して多数の聴客を満足せしめ午後八
時半終演。翌五日は朝十時から新宿の芙蓉会
館に於て総会に引続き懇親会で全国琵琶友間の
旧交を温ためて二時半頃散会。斯くて年一回
の錦心祭全国大会はめでたく終了した。(出
演者と曲目は省略)。

錦心流一水会全国大会

十一月五日(日)正午名古屋中小企業福祉会館
六階ホール、主催一水会名古屋支部(支部長
奥村慧水氏)、協賛豊橋静岡岡支部。七卿落
一糸井(紅葉狩)赤坂(河内)宿(井村)月
下の陣(成瀬)城山(伊藤)嘉水(別れの国歌)
一岩間寛水(宮公)大西弦水(本能寺)吉見
輝水(湖水乗切)海野京水(五条橋)小林残

錦心流琵琶演奏会

十一月九日(日)午後三時十分NHK・FM。
城山一山口速水(景清)水藤五郎(両氏)。

ラヂオ琵琶放送

十一月九日(日)午後三時十分NHK・FM。
城山一山口速水(景清)水藤五郎(両氏)。

水(粟津)原一三輪(水)新撰組(丹野)水
河(中島)水谷(水)以下(来賓)須磨の敦
盛(神戸)楊水(橋)大隊長(静岡)広住(水)▼
竜(口)大木(木)蓮水(井伊)大老(福井)内田
景水(楠)正成(豊橋)田中(訴)水(白虎)隊(京都)
馬場(鴨)水(坂崎)出羽守(金沢)田中(篁)水(桶狭
間)一会主(奥村)水。

筑前琵琶演奏大会

十一月十五日(日)正午東京日本橋第一証券ホ
ール、主催東京旭会。壺坂寺(吉田)旭明(絃
安倍)旭静(若)若(敦)盛(福田)旭盛(お蝶)夫人(一
原)田旭蓮(絃)原(島)旭(北)の庄(松元)旭川(▼
秋)故郷(山)一(齊)藤(旭)色(巡)礼(お鶴)一(正)田(旭)絃
▼(大)森(七)一(渡)辺(旭)寂(二)〇(三)高(地)一(若)宮(旭)
登(一)塚(原)ト(伝)一(大)津(旭)紅(大)德(寺)一(野)田(旭)条
▼(伊)豆(の)御(難)一(原)島(旭)紅(唐)人(お)吉(藤)巻(旭)
鴻(網)籠(旭)明(旭)議(旭)絃(絃)旭(静)旭(色)。

京都琵琶協会の観楓会 十一月十二日(日)通
天閣、東福寺等の洛南方面。(次号詳報)。
洲風会演奏会(第二組出演) 十一月十八
日(日)夕東京上野本牧亭。(次号詳報)。
晴風会霜月例会 十一月二十三日(日)夕東京
杉並区高円寺会館。(次号詳報)。
三ツ和会演奏会 十一月二十六日(日)夕東京都
東山安井金比羅会館。(次号詳報)。

○：京都琵琶協会十二月例会 十二月三日(日)
昼一時本部平井春嶺会長宅。
○：晴風会新春演奏会 一月二十一日(日)昼東
京杉並区高円寺会館。
○：新春名流演奏会 一月二十六日(日)正午東
京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。
○：錦心流一水会京都支部例会 十二月十日
(日)昼一時東山仁王門本妙寺。

あとも一ヶ月で早くも今年が終ろう
として、又一つ齢を重ねると思
うと嬉しいやら恥づかしいやら、人
間を長くやっていける身には感無量で
ある。余談ながら大阪府ひらかたパークで毎
年開かれる大小色とりどり数千株の奇麗な菊
人形展が今秋は「太閤秀吉」で編集子は先日
寸暇を割いて覗いてみた。NHKの「黄金の
日日」にちなんだ二十六場面が秀吉の幼少時
代から晩年までで、本能寺の変、その他琵琶
歌関係のものが動的に展開されていた。また
関ヶ原合戦絵巻は本号辻旭城先生執筆の一文
と思ひ合わせて特に印象に残った。本号は内
容幅狭で二、三の貴重な記事を次号廻しとし
た、不慮、新年号年賀交礼掲載のお申し込み
何卒よろしく。ではどうぞよいお年をお迎え
下さい。

昭和五十三年十二月一日発行(非売品)
編集者 植村 稟
発行所 高槻市津之江北町一ノ二二三
電話 〇七二六(七三)六〇五二番

琵琶 機関紙

京

絃

第二九四号 京絃社

琵琶 (三)

対馬の盲僧(1)

博多から敵原へ
私は地神盲僧を訪ね、春四月、博多から船
で対馬へと渡った。朝鮮半島を約五十キロメ
ートルの北方海上に望む対馬への琵琶探訪の
旅は、私に大きな期待を懐かせるものであつ
た。ここで、その折りの話を当時の日誌から
紹介してみよう。

船は、老岐の島の郷之浦港を経て、数時間
の航海の後、目指す対馬、敵原港に着いた。
船が最終便だった故か、既にあたりは暗く波
止場附近は少しばかり寂しい風情である。潮
風の匂いと波止場の前方に見える街の火は、
海のもつ厳しさと、疲れた船人を待つ、ちっ
ぽけな盛り場の素朴なぬくもりを微かに感じ
させる。もう夜の八時過ぎた時分であるうか、
土産物の店も、そろそろ閉店の時刻だろう。
戸を閉め始めている店も何軒か見られる。
傍に柳の木が植えてある川に沿って続く街

対馬の盲僧(1)

並みは、いかにも貧しい島の港町といつた哀
感を、ほのかに漂わせる。道路脇の「対州そ
ば」という古い木看板の掲げてある店に入る。
何となく昔の街道筋の茶屋を想い起こさせる
ような趣の有る店である。私は、この店の名
物である「対州そば」を所望した。昨年、対
馬を訪ねた折りの事が懐しく想い出される。
おばあちゃん元気で居るだろうか。昨年、
訪問した折りは、驚く程大きな声で、多くの
経文や語り物を私に語って聞かせてくれたも
のだが……。



村山道宣

多田のおばあちゃん
「おばあちゃん」と云うのは、敵原に住む
地神盲僧、多田聖代さんのことである。御主
人の「しよげん」さんが昭和二十九年に五
十五才で亡くなられてから現在まで、ずっと
おばあちゃんがその法流を護り伝えて来た。
(しよげんさんは、明治二十二年、対馬峰
村に生まれ、十才の年、玄清法流地神盲僧、

藤島よりじゅん氏の弟子になり、十年間、敵
原町宮谷の顯明院で修業した後、同町の丸山
に家を構え、地神盲僧として生活していた。
おばあちゃんは明治四十四年生まれ、六十
八才、下県郡久根村の出身である。おばあち
ゃんは、幼少時より、目は全く見えなかった。
七才の時、天理教に入信したが、目が不自由
なため天理教の踊りは上手に出来なかった。
それから一年程して、御大師様の熱心な信者
で、炭焼きをしていた渡辺乙五郎と云う人に
導かれ、御大師様を信仰するようになった。
乙五郎さんは、般若心経、一心頂礼、十句観
音経、十三仏の真言など、お経もいくつか教
えてくれた。そして、十四才の年、宮崎市大
淀町にある今福寺という、真言宗のお寺に修
行に出た。一年近く和讃を習うなどして、今
福寺で暮した後、熊本県八代市にも一ヶ月ほ
ど、御詠歌を習うために逗留し、対馬へと帰
って来た。
それから数年後、多田しよげんさん(法
名日芳)のもとに弟子入りするようになった。
そうこうしているうちにしよげんさんは、お
ばあちゃんのことを大層気に入るようになった。
てしまふ二人は結婚することになった。
ちよっと余談になるが、その折りのしよ
げんさんの口説き方というのが全く奮って
いた。「おまえは、わしの嫁にならんか?」
しよげんさんが云うなら、わしがおまえに数年
来教えて来たお経や秘法を、全部返して寄こ
せ!それが出来ないのならわしの嫁になれ!